

魏志倭人伝からわかる、邪馬台国九州説が成り立たない理由

菊地昌美

1

「州胡あり、馬韓の西、海中の大島の上に在り」、

これは、魏志倭人伝の前の、魏志韓伝の一文です。

なんと、朝鮮半島南部西岸の、馬韓つまり後の百済の西に、州胡つまり済州島があると言っているのです。

済州島は馬韓のほぼ南にあります。

魏志倭人伝の編者の陳寿は、90度近くも方角を誤り、南を時計回りに、90度プラスして、西と表現していたのです。

それならば、南と書いてあるのは、時計回りから90度マイナスして、東になります。

東は北、北は西となります。

このことから、『魏志倭人伝』を修正すると、

不弥国……東至投馬国、水行二十日

投馬国……東至邪馬壹国、女王之所都、水行十日、陸行一月

自女王国以西、其戸数道里可得略載、其余旁国遠絶、不可得詳

其東有狗奴国。男子為王。其官有狗古智卑狗 不属女王

自女王国以西。特置一大率。檢察諸国。諸国畏揮之。常治伊都国。於国中有如刺史。

女王国北渡海千余里。復有国。皆倭種。

となります。

つまり、『魏志倭人伝』の、「不彌国の南に投馬国、投馬国の南に邪馬台国」の南が東と訂正されます。

また、狗奴国との方角も、『魏志倭人伝』の「南有狗奴国」を訂正して、「東有狗奴国」となります。

2

魏志倭人伝には、

「自女王国以北。其戸数道里。可得略載。其余旁国遠絶。不可得詳。

次有斯馬国。次有巳百支国。次有伊邪国。次有都支国。次有彌奴国。次有好古都国。次有不呼国。次有姐奴国。次有对蘇国。次有蘇奴国。次有呼邑国。次有華奴蘇奴国。次有鬼国。次有為吾国。次有鬼奴国。次有邪馬国。次有躬臣国。次有巴利国。次有支惟国。次有烏奴国、次有奴国。

此女王境界所尽。

其南有狗奴国。男子為王。其官有狗古智卑狗。不属女王」。

とあります。

对海（馬）国。一大（支）国。末盧国。伊都国。奴国。不彌国。投馬国。邪馬臺国まで連続して記述して、「自女王国以北。其戸数道里。可得略載」と、その記述内容を説明していますが、

「使訳所通三十国」の残りの、邪馬台国の支配下にある21か国と狗奴国の内、

21か国について、「其余旁国遠絶。不可得詳」として、「次有斯馬国以下21か国を記述し」、

そのうえ「此女王境界所尽」と書き、21か国が邪馬台国の支配下にあったことを説明しています。

このことから、邪馬台国と前述7か国は、

「此女王境界所尽。其南有狗奴国」とあるように、狗奴国より北にある国となります。

邪馬台国を九州に置いたとき、狗奴国も九州にあり、それも邪馬台国関係29か国の南にあることとなります。

つまり、「投馬国五万余戸。邪馬台国七万余戸」の大国が狗奴国の北にあることとなります。

それも、「伊都国・奴国・不彌国の南に投馬国、投馬国の南に邪馬台国」となり、

九州の北部の伊都国・奴国・不彌国から、南方の投馬国、邪馬台国、狗奴国に向かうとき、その途中にある国々は通過、もしくは側を通らずには行けないはずで、

つまり、九州には、「遠絶」にして「不可得詳」のように、説明することのできない「余旁国」21か国は置くことができませんので、邪馬台国九州説は成り立ちません。

3

魏志倭人伝には「自女王国以北。其戸数道里。可得略載」とあり、

戸数道理を説明してある国々は、邪馬台国の北にあることとなります。

「伊都国……東南至奴国百里……東行至不弥国百里……南至投馬国、水行二十日……南至邪馬壹国、女王之所都、水行十日、陸行一月」とある記述は、不弥国……投馬国……邪馬壹国と、順番に書かれていますので、放射説のような説は成り立ちません。

4

『魏志倭人伝』に「女王国……。其南有狗奴国。男子為王。其官有狗古智卑狗。不属女王」とあったのが、

247年の記録に『倭女王卑弥呼与狗奴国男王卑弥弓呼素不和。遣倭載斯烏越等詣郡。説相攻撃状。遣塞曹掾史張政等。因齎詔書黄幢。拜假難升米。為檄告諭之。』とあります。このことから邪馬台国が、以前は支配下に無かった狗奴国と、247年当時には、戦争状態にあったことがわかります。

この戦争がどのくらい続いたのかは、『魏志倭人伝』に『壹與遣倭大夫率善中郎将掖邪狗等二十人。送政等還』と有り、卑弥呼の跡継ぎ台与が、郡から派遣されていた塞曹掾史張政等を晋の都まで送ったことが判ります。

この年が何年か、書いてありません。

ただ、晋書に266年、倭の女王台与が朝貢したことが書いてあります。

この年を『魏志倭人伝』の『壹與遣倭大夫率善中郎将掖邪狗等二十人。送政等還』の記述の年とすると、邪馬台国と狗奴国の戦争は、246年から266年まで続いたことになります。

約20年に及ぶ倭国内の内戦から判ることはどんなことでしょうか。

もし、邪馬台国と狗奴国がすぐそばにある国なら、7万戸の邪馬台国と同じくらいの勢力を持つ国の対立です。20年もの戦争を続けることが出来るのでしょうか、このことから、邪馬台国と狗奴国がそうとう離れた国だったことが推測出来ます。

奇襲とか夜襲とかが簡単に出来るすぐ側の国でなかったということです。

つまり九州内にこの両国をすぐ側の国としておくことは不可能と思います。

卑弥呼が死んだ後、『魏志倭人伝』には『卑弥呼以死。……更立男王。国中不服。更相誅殺。当時殺千余人。復立卑弥呼宗女壹與年十三為王。国中遂定』とあります。

大倭王卑弥呼の死後、後をついだ男王に、服従しない勢力がいて、権力争いとなり、当時千余人が死ぬような争いがおこります。

邪馬台国と戦争をしている狗奴国にとって、この状態は千載一遇の好機です。すぐ側に狗奴国があったら、邪馬台国を制圧出来たでしょう。

また、跡継ぎは『復立卑弥呼宗女壹與年十三為王。国中遂定』とあるように、13歳の少女で、実績もありません。何故邪馬台国は狗奴国に制圧されなかったのでしょうか。それは、邪馬台国と狗奴国がそうとう距離の離れた国だったということを示しています。

5

魏志倭人伝には、簡略すると

「対馬国は千余戸。

壱岐国は三千許家。

末廬国は四千余戸。

伊都国は千余戸。

奴国は二万余戸。

不弥国は千余家。

投馬国は五万余戸。

邪馬台国は七万余戸」

とあります。

ここには、戸と家がありますので、戸と家の関係を調べます。

『魏志韓伝』には、

「韓人……居処作草屋土室、形如冢、其戸在上、举家共在中」とありますので、

戸は数軒の家からなっていたと考えられます。

また、

『魏志韓伝』に、

「弁・辰韓合二十四国、大国四五千家、小国六七百家、総四五万戸。」とありますので、

1戸=2家となります。

そこで、

対馬国は千余戸。

壱岐国は三千許家——→1500戸

末廬国は四千余戸。

伊都国は千余戸。

奴国は二万余戸。

不弥国は千余家——→500戸

投馬国は五万余戸
邪馬台国は七万余戸
となります。
ところで、当時の戸は平均何人位の人数だったのでしょうか
『魏志倭人伝』には、
「屋室有り、父母兄弟臥息処を異にす」
「其の会堂坐起、父子男女別無し」
「大人皆四五婦、下戸或いは二三婦」とあります。
1家族は何人位が平均だったのでしょうか。
「大人皆四五婦、下戸或いは二三婦」とありますので、下戸の中にも2・3婦をもっている場合があります。
その平均の複数の妻達と、その子達で構成される戸は、何人くらいで構成されていたのでしょうか。
いろいろな国や、澤田吾一氏の「奈良朝時代民政経済の数的研究」から、複数の妻達と、その子達で構成される家族数の例を調べてみますと、妻が2・3人の場合は1家族十数人となる例が多いようです。
そこで1戸平均10人位とすると、
対馬国の千戸は1万人。
壱岐国の三千家は1500戸で1万5000人。
末廬國の四千戸は4万人。
伊都国の千戸は1万人。
奴国の二万戸は20万人。
不弥国の千家は500戸で5000人。
投馬国は五万戸で50万人。
邪馬台国は七万戸で70万人。
邪馬台国関係の8国の、総戸数は14万8000戸。
1戸10人とすると148万人となります。
さらに『魏志倭人伝』には、
「自女王国以北、其戸数道里可得略載、其余旁国遠絶、不可得詳」とありますので、この人口も、邪馬台国関係の人口になります。
奴国を除いて、戸と表現されている国の対馬国、末廬国、伊都国、の戸数は、全部で6千戸。
1国平均は2千戸となります。
すると余旁国21国で4万2千戸。1戸10人平均として、42万人。
対馬国から邪馬台国までの8国の148万人と合わせると、邪馬台国関係29国の推測合計190万人。
これに狗奴国の戸数・人口と、国をつくっていない地域の人口を推測して合わせたらどの位になるでしょうか。
300万人近くなるのではと推測しています。
ところで、「奈良朝時代民政経済の数的研究」という、澤田吾一氏の本の中に、「諸国の郷別人口附、諸国人口表・郷数表・田積表」という一節があり、8世紀の中頃の諸国の人口を推定して表にしています。
これによると、賤民などをのぞいた全国の人口は、
5、386、150人となります。
そして、九州の人口は、697、450人となります。
邪馬台国九州説をとれば、狗奴国まで九州になります。
その人口も加えて考えたとき、190万人+狗奴国人口は、なんと500年後の奈良時代の九州地方の人口約70万人の3倍以上となってしまいます。
このような時代を逆転させる説は成り立ちませんので、邪馬台国九州説はあり得ないと思います。

この文は拙著「改訂新版 邪馬台国は大和国」の一部分の要約です。